

「KEKロードマップ2013 中間まとめ」に関する要望書

PF-U A会長 佐藤 衛

今回のKEKロードマップ中間とりまとめ(案)は、施設のおかれた状況を様々な点から注意深く検討されて練り上げられたものとなっており、そのとりまとめのご苦勞に深く感謝をいたします。

なお、本要望書は、PF-U A戦略小委員会(委員長:腰原伸也 東工大教授)での検討、「KEKロードマップ2013 中間まとめ」公開後にPF-U A会員から寄せられた意見、並びに「KEKロードマップ2013 中間まとめ」に関する施設側とPF-U A担当幹事との意見交換会(2012年11月13日にKEK東京事務所で開催)での議論に基づいてまとめたものです。

注:KEKロードマップ中間まとめ(案)に関する意見交換会出席者(敬称略)

施設(KEK)側

山田和芳(物構研・所長)、村上洋一(PF・施設長)、伊藤健二(PF・主幹)、足立伸一(PF・主幹)、河田 洋(PF、ERL推進室長)、小林幸則(加速器7系・主幹)、

PF-U A側

佐藤 衛(横浜市立大学)、腰原伸也(東京工業大学)、尾嶋正治(東京大学)、雨宮慶幸(東京大学)、三木邦夫(京都大学)、朴 三用(横浜市立大学)

要望事項:

- 1:KEKが有する放射光、中性子、ミューオンの各量子ビーム施設に共通する目標を掲げることは、各量子ビーム施設の今後の存続と発展のために非常に重要です。加えて、KEKの基盤的共用施設および先端的研究施設としての役割の両立を図ることは、法人のミッションとしてのみならず、今後のわが国の科学技術の発展にとってもきわめて重要であります。この点はわれわれも十分に理解し、基盤的共用施設としての役割がユーザーが今後の研究計画を考えて行く上での信頼感、安心感の醸成に必須の要素と考えています。しかしながら、KEK全体が各量子ビーム施設に共通する目標を達成させるためにミッションを集中させると、KEKが幅広い支持を集めてきたユーザーの創意・

工夫によるボトムアップ的な研究の発展を妨げることが危惧されます。この点についてKEKは「むしろ、逆に幅広い共同利用研究を今後も引き続き支えていくためにも、施設共通の目標としての先端的研究が重要である」と認識されているとのことですので、この点を明確化するために、ロードマップの前文等において対応されることをお願いしたいと思います。

2 : 1とも関連しますが、今後の各量子ビーム施設の運営上における共同利用研究を強力に推進していくために、それぞれの量子ビーム（放射光、中性子、ミューオン）間に共通する先端利用のサイエンス、さらには、量子ビーム開発のサイエンスを目指すといった形の文章を中間とりまとめに取り入れていただきたいと思います。これと関連して、放射光、中性子、ミューオンの3つの量子ビームに共通するキーワードを挙げることも必要です。しかしながら、ご提案の「水素とスピン」だけでは3つの量子ビームが共通を目指すサイエンスのキーワードとしては不十分であると思います。サイエンスの分野が多岐にわたり、1つのキーワードで表現することが困難な場合は複数のキーワードを用いることも一案で、再考をお願いいたします。

3 : PFの将来光源としてのERL計画については、東北放射光計画や世界（特にアジア地域）の放射光源とのバランスや相補性、さらには具体的な予算の問題等、未確定な要素が多いため、具体的な結論は得られていません。ただ、(1) ERL完成後もこれまでの共同利用の放射光実験が連続的かつスムーズに継続できること、(2) ユーザーと施設の双方が今後の利用サイエンスを含めた実質的な必要性の相互理解と夢のある具体的利用計画を立てる活動を加速すること、(3) 国内の他の施設とKEKとの対話を積極的かつ迅速に進める必要があること、などをお願いしたいと思います。

以下の4～6は文章技法上の問題でもありますが、具体的問題点として指摘させていただきます。

- 4 : 3.5 節 (フォトンサイエンス) のコヒーレント分光研究で扱うものと重点領域を比較すると、物質面ではかなり限定的な印象を与える恐れがあります。この点での一貫性をどのように確保し、新光源に向けての持続的ユーザー確保策とされるのか、ご検討ください。
- 5 : 最後のミュオン、陽電子への重きの置き方など一貫した (付帯事項とは異なる) 表現の調整が必要と考えます。
- 6 : まとめでは、PFやPF-ARの高度化が、フォトンサイエンス (3.5 節) の一貫として登場しますが、この節自身には登場していないので、加筆の必要があると思われます。